

長らくおつきあいいただいたこのコラムも、今回で最後となりました。ご愛読くださったみなさまに感謝いたします。

二年前に書き始めたころは、イスラム過激派との対話やカトリック教皇の交代などを取り上げました。その後も時事の話題に沿って天皇制や靖国神社、教義論争、修復的司法、和解の政治学、オウム真理教やエホバの証人

と信教の自由、などに触れてきました。それに「現代社会の座標軸」を考える際のキーワードになると思われたことです。でも、最後にもう一つ、申し上げたいことがあります。

「キリスト者として生きる」とはどういうことか。それは、「喜び、喜べ」です。「現代社会の座標軸を」などと考えていると、どうも何となくお堅い道徳の話になり、「お説教」になってしまいます。でも、信仰は道徳ではありません。イエスは、たんに「善行を積みなさい」とおっしゃったわけではありません。「飢えた者に食べ物を恵んでやりなさい」と言われたのではなく、「その人々と一緒に宴会を催しなさい」とおっしゃったのです(ルカ14・13)。「宴会」ですよ、みなさん！人々を招いて一緒に座り、ゆつくりと食事を楽しむことです。何かをすることよりも、一緒にいるのを喜ぶことです。

しばしば言われることですが、日本の教会にはこの「喜び」が少し足りないように思います。わたしも、各地の教会にまいりますと、つくづく感じます。牧師の説教が長くて難しい、と信徒がこぼすのはよく聞きますが、その信徒がささげるお祈りも、長くて難しいのです。わたしは本誌冒頭に毎号掲げられている祈りが大好きです。教会の礼拝でもあんな素直な祈りができればいいな、といつも思うのですが、現実には聞くのは、とても形式ばったお祈りばかりです。

実は、どこの国でも、少数派というのははじめです。西洋諸国の仏教徒を見てください。日ごろわたしたちが目になっている日本の仏教徒とは比べものにならないくらいはじめです。周囲の人々との違いを否応なく自覚してしまうし、いっしょうけんめいに肩肘を張っていないと、知らぬ間に埋没してしまうからです。日本のクリスチャンは、人口のパーセント

キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第24回 最終回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

「宴会」ですよ、みなさん！

本誌読者のみなさんは、きつとまじめな方々でしょう。礼拝を欠かさず、早朝から午後まで奉仕も目いっぱい。

なかには、それで「教会疲れ」してしまう人も出てきます。でも、「キリスト者として生きる」ということは、

一生のことがらです。

まじめすぎてくたびれてしまったのは、

生涯を通して続けることはできません。

少しだけ、肩の力を抜いてもいいのではないのでしょうか。

にも満たない少数派ですから、まじめにも「超」がついてしまうのでしょうか。逆に、多数派はいい加減です。西洋諸国のクリスチャンを見てください。毎週欠かさず教会に行っている、なんて人ばかりではありません。つまり、ごく大雑把ざっぱに言うと、信徒の数とまじめさとは反比例するわけです。なるほど。よし、それなら、日本のクリスチャンも、少し不まじめになれば、数も増えるに違いない。伝道のために、不まじめなクリスチャンになろう！

……というのは冗談です。でも、四分の一くらいは本気です。本誌読者のみなさんは、きつとまじめな方々ばかりでしょう。一週たりとも礼拝を欠かさず、早朝から午後まで奉

仕も目いっぱい。なかには、それで「教会疲れ」してしまう人も出てきます。でも、「キリスト者として生きる」ということは、一生のことがらです。まじめすぎてくたびれてしまつては、生涯を通して続けることはできません。少しだけ、肩の力を抜いてもいいのではないのでしょうか。

ちなみに、わたしのいるICU教会では「なんちゃってクリスチャン」(略して「なんクリ」)がはびこっています。何せ歴代の牧師も、わたし自身を含めて「なんちゃって牧師」ばかりですから、それも当然といえば当然なのですが……。彼らの特徴は、礼拝も奉仕もそこそこ。でも、教会につながっていることをとても大事にしており、クリスチャ

ンとしてのアイデンティティは揺らぐことがない。だから人生行路の大事な決断はすべてそこでなされる。大人になっても、卒業しても、家族が増えても、子どもが巣立っても、歳をとっても、いつでも教会が居場所である。そんな人々です。

それでも、くたびれてしまうことはあります。ひところは、毎年のバザーが何千人という人出で大きな負担になっていましたので、一度きれいさっぱり止めてしまいました。創立以来存在していた婦人会も、数年前に廃止してしまいました。バザーがそうであったように、必要ならきつとまた新しく始まるでしょう。やりたい人が集まって再開すれば、きつと楽しくできます。最初に始めた時だって、そうやって始まったに違いありません。そのいぶきがあれば、教会はもう一度「神の国の饗宴さむらい」になります。

どんなに立派な業があつても、わたしたちが暗い顔でつまらなそうにやっていたのでは、ちつとも証しにはなりません。わたしもこの二年は連載の締め切りが迫るたびに暗い顔をしていましたが、やっぱり最後はパウロのこの言葉を聞いて終わりたいと思います。ICU教会がいちばん大事にしている聖句ですが、きつとこの教会にもあてはまると思っています。「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい」(フィリピ4・4) (ア)